

東日本大震災

日本ユニセフ協会

緊急・復興支援活動

6ヵ月レポート

— 子どもにやさしい復興をめざして



ごあいさつ



2011年3月11日に発生した大地震。東京都港区のユニセフハウスでも大きな揺れを感じました。長く続く余震の中、不安な一夜を過ごしながら、私たちに今すぐできることはないかと考えて実行したのが、ユニセフハウスのホールを帰宅困難者となった皆様に開放すること。そして、ユニセフの緊急時対応マニュアルを基にまとめた「家庭でできる心のケアのヒント」の日本語版を作って、当協会のホームページで紹介することでした。

夜が明け、被災地の状況が次第に明らかになるにつれ、あまりの被害の大きさに言葉を失いました。この未曾有の大災害によって、どれほど多く子どもたちが亡くなり、また、家族や友だち、住む家や学校を失ったことでしょう。そして、どれほど多く子どもたちが心に深い傷を負ったことでしょう。被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

震災直後、ユニセフのアンソニー・レーク事務局長は、これまで日本が途上国の子どもたちと家族のために、行ってきた支援に感謝を表するとともに、東日本大震災で困難に見舞われている日本の子どもたちのためにいかなる緊急支援をも行う準備を整えているという声明を発表しました。日本ユニセフ協会も、すぐにスタッフを現地に派遣し、以後、現地の皆様と協力しながら、子どもたちの健康を守り、教育の機会を取り戻し、心のケアを行うなど、様々な緊急支援活動を展開してまいりました。

ユニセフが日本国内で支援活動を行うのは、第二次世界大戦直後の脱脂粉乳などの支援以来、約半世紀ぶりのことです。日本ユニセフ協会のスタッフにとっても今回の大震災は初めての体験でしたが、状況がどんなに困難であっても、どんな問題が発生しても、私たちが迷うことなく被災地で支援活動を続けてこられたのは、そこに喜ぶ子どもたちの笑顔があったからです。そして、私たちの背中を強く押してくださったのは、国内外の皆様からの「被災地の子どもたちを支援したい」というたくさんの声でした。皆様からの温かいご支援に勇気をいただき、心は「子どもたちのために」という思いでつながっていることを実感しています。私たちの活動を支えてくださる皆様お一人おひとりに、この報告書を通じて心から感謝の気持ちをお届けできれば幸いに存じます。

震災発生から半年が経ちましたが、復興支援はまだ始まったばかり。やらなければならないことは山積みですが、私たちはこれからも心をひとつにして、「Build Back Better」(被災前よりも、よい良い状態になること)をめざして活動を続けていく所存です。どうぞこれからも変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

公益財団法人 日本ユニセフ協会 会長

赤松良子

Contents



【表紙写真】
津波と火災で被災した岩手県の大槌小学校 (撮影：新藤健一)
※本文中にクレジット記載のある写真
以外はすべて © 日本ユニセフ協会

被災状況(全国)/募金活動状況	1	未来を創る子どもたちへのエール	14
支援活動の目的と取り組み	2	Messages	15
6カ月の活動ハイライトと 今後の活動予定	3	6カ月収支報告	16
緊急・復興支援活動6ヵ月レポート	4	支援活動を支えてくださったみなさま	17
緊急フェーズの活動.....	5	ご支援・ご協力のまとめ.....	17
教育支援.....	7	日本ユニセフ協会からこれまでに 被災地/被災者に提供された支援物資一覧..	17
保健・栄養支援.....	10		
子どもの心理社会的ケア・子どもの保護.....	11		
被災地から届いた子どもたちの たくさんの「笑顔」と「ありがとう」.....	13		



被災状況 (全国)

学校 (公立・私立) の被災状況※1

小学校	3,269校
中学校	1,700校
高等学校	981校
中等教育学校	7校
特別支援学校	186校

幼稚園 (公立・私立) の被災状況※1

幼稚園	941園
-----	------

保育所 (認可保育所・認可外保育施設) の被災状況※2

保育所 (園)	1,591園
---------	--------

主な被害状況：校舎や体育館の倒壊や半焼、津波による流出、水没、浸水、地盤沈下、校庭の段差や亀裂、外壁・天井の落下、外壁亀裂、ガラス破損など

※1 文部科学省「東日本大震災による被害情報について (第158報)」(2011年9月8日発表)

※2 厚生労働省 雇用均等児童家庭局 保育課調べ (2011年6月1日時点)

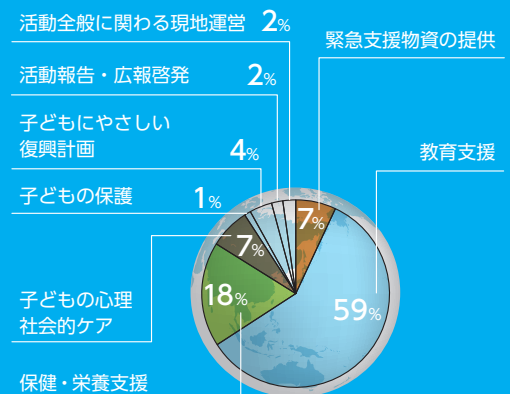
募金活動状況 (2011年8月31日現在)

日本ユニセフ協会に寄せられた 東日本大震災緊急募金

*国内から 21億9,950万9,786円

*海外から 10億7,100万7,200円

活動分野別 募金使途 (割合)



※ 募金使途の割合は、支出見通し額を含む全体額から算出 (収支報告は、P.16を参照)

支援活動の目的と取り組み

子どもにやさしい復興をめざして

「あらゆる自然災害で、もっとも困難な状況におかれてしまうのは子どもたち」。ユニセフが2007年4月にまとめた緊急時対応マニュアルは、こう指摘しています。子どもたちは、災害発生時だけでなく、その後も特別なケアを必要とします。

日本ユニセフ協会は、世界中の子どもの生存・発達・保護・参加を促進するユニセフファミリーの一員として、ユニセフ

本部およびユニセフ東京事務所、並びに協力団体・企業などの協力を得て、東日本大震災で被災した子どもの支援に関わる分野での緊急・復興支援活動を実施しています。

特に、専門的な知識を必要とする心理社会的支援や、教育、保健をはじめとする重要なサービスを提供するための支援を続けています。

緊急・復興支援における6つの取り組み



6カ月の活動ハイライトと今後の活動予定

震災発生から1ヵ月

緊急支援物資の提供と
母子への保健衛生、
栄養支援

主な支援活動状況

- 飲料水、子ども用衣料、衛生用品、靴などの支援物資の調達・配布
- 母乳育児を含めた母子保健事業の支援（継続中）
- 「子どもにやさしい空間」の設置やプレイセラピー講習などを通じた心のケア支援を開始
- 国際的スタンダードに基づく震災孤児に対する代替的養護を訴えるアドボカシー

震災発生から2ヵ月

学校・保育園・幼稚園の
再開と心のケア
支援の拡大

- 「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーン フェーズIの実施
 - ①ランドセルや文房具などの学用品を提供
 - ②小中学校に机、椅子、コンピュータなどの機器、備品、仮設トイレなどを提供
- 学校・保育園・幼稚園での給食やおやつなどの栄養補給支援（継続中）
- 保育園や幼稚園、学童保育施設に知育玩具や机、椅子、食器などを提供
- 心のケア支援の拡大
 - ①「ユニセフちっちゃな図書館」プロジェクト：全国から寄贈された児童書をセットにして、保育園・幼稚園、個人宅などに送付（継続中）
 - ②ユニセフ こどもバス遠足：子どもたちに思いっきり外遊びやさまざまな体験を楽しむ機会を提供するバス遠足を開始（継続中）
 - ③プレイセラピー講習・臨床心理士による支援の拡大展開（継続中）

震災発生から 3ヵ月～6ヵ月

中長期的な
復興支援ヘシフト

- 「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーン フェーズIIの実施
小中学生に、体操着、習字道具、絵の具、副教材などの学用品の購入支援（継続中）
- 中学・高等学校総合体育大会開催支援
- 学校健診用資材の提供（継続中）
- 乳幼児健診、予防接種など母子保健事業の本格的再開への支援（継続中）
- 保育園、幼稚園、障害児施設、学童保育施設の建設支援（継続中）
- 仮設住宅などへの「子育て支援センター」機能の併設支援・アドボカシー（継続中）
- 虐待防止キャンペーン（継続中）

今後の活動予定

震災発生から半年が経過した今、被災地では復興に向けた活動が始まっていますが、自らも被災者である各地方自治体は、まだ本来の機能を完全に取り戻すまでには至っていません。

日本ユニセフ協会は、この6ヵ月間、①子どもたちの教育支援、②お母さんと赤ちゃんの保健・栄養支援、③子どもの保護支援の3つの分野において行政サービス機能の回復のための支援を行うとともに、被災地の子どもたちの状況が、被災以前よりも、より良い状態になること（Build Back Better）をめざして活動を続けてきました。

今後は、被災した子どもたちへの包括的な社会保護の拡充、子どもたちへの虐待防止、さらに市町村における復興計画に子どもの意見を反映させることなど、長期的な支援を視野に入れた活動を展開していきます。



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Shindo



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / Grehan



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / Grehan



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Goto



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Goto



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Goto



2011.3.11
EAST JAPAN

午後2時46分
マグニチュード9.0の巨大地震、
最高38.9m(遡上高)の大津波発生

緊急・復興支援活動 6カ月レポート

日本ユニセフ協会の緊急支援活動実施の決定を受けて、ユニセフのアンソニー・レーク事務局長は、日本時間の2011年3月13日深夜、東日本大震災で被災した子どもたちを支援するために、日本ユニセフ協会と協力して緊急支援を提供する用意があることを日本政府に対して正式に表明しました。ユニセフが日本国内で支援活動を展開するのは、第2次世界大戦後、約15年間続いた粉ミルク(脱脂粉乳)などの学校給食を通じた支援や、1959年の伊勢湾台風被災者への緊急支援以来、約50年ぶりとなります。

これと並行し、日本ユニセフ協会は、3月14日に「東日本大震災緊急募金」の受付を開始するとともに、当座の活動資金として国内事業費から1億円を準備。被災地の地方自治体やパートナー団体などの協力を得て、飲料水や子ども用の肌着などの緊急支援物資を、避難生活を送られている被災者の人々に提供しました。

支援活動実施地域

岩手県

盛岡市	八幡平市
奥州市	矢巾町
一関市	陸前高田市
花巻市	山田町
北上市	雫石町
宮古市	洋野町
滝沢村	大槌町
大船渡市	岩泉町
釜石市	西和賀町
久慈市	住田町
紫波町	野田村
二戸市	田野畑村
遠野市	普代村

宮城県

仙台市	美里町
石巻市	大和町
大崎市	大河原町
登米市	七ヶ浜町
栗原市	涌谷町
気仙沼市	南三陸町
名取市	山元町
多賀城市	丸森町
塩竈市	松島町
富谷町	蔵王町
岩沼市	村田町
東松島市	女川町
柴田町	川崎町
白石市	大郷町
亘理町	色麻町
利府町	大衡村
角田市	七ヶ宿町
加美町	

福島県

いわき市	三春町
郡山市	石川町
福島市	猪苗代町
南相馬市	川俣町
伊達市	富岡町
白河市	桑折町
二本松市	国見町
相馬市	大玉村
本宮市	新地町
西郷村	双葉町
矢吹町	広野町



※支援活動実施地域は、市町村の行政区分に従って表しています。

緊急フェーズの活動



緊急支援物資の確保と輸送

地震発生から2日後の3月13日、日本ユニセフ協会は国内での支援活動の実施を決定しました。17日まで実施した宮城県での第一次調査に基づき、ペットボトル入りの水、紙おむつ、生理用品、トイレトーパー、玩具などを国内で調達することを決定。それと並行して、デンマーク・コペンハーゲンにあるユニセフ物資供給センターから、「レクリエーション・キット」、「幼稚園キット」などを取り寄せる手配をしました。

間もなく、当協会は企業から寄贈された飲料水、子ども用の紙おむつやお尻ふき、そして、独自に調達した20万枚を超える子ども用の下着や衣類などを、岩手、宮城、福島各県の被災地へ届けました。

震災直後の被災地は、あらゆる物資が必要とされたにも関わらず、物流インフラが大きな被害を受け、ガソリンの調達も非常に難しい状況でした。被災地まで物資を運ぶトラックや物流拠点となる倉庫などの確保が難航するなか、当協会の緊急支援物資を被災者のもとにいち早く届けることができたのは、被災各地の避難所などへの物流ルートを確認していた生活協同組合や、現地市民団体などとのパートナーシップによるものでした。



宮城県災害対策本部で協議をするユニセフの國井 修

支援物資と専門家を被災地に

日本ユニセフ協会は、3月18日、子どもの支援に関わる分野を中心にサポートするという基本方針と当面の活動内容を発表。その翌19日に日本ユニセフ協会スタッフとユニセフ・ソマリア事務所から応援派遣された日本人専門家の國井修が、岩手、宮城両県の災害対策本部の保健・教育担当者、岩手県ユニセフ協会、宮城県ユニセフ協会を訪問し、今後の支援活動について協議を重ねました。

福島県では、原発事故の影響で多くの地域の住民が県外に避難しつつあるため、どこに何人の子どもたちがいるのか把握しきれておらず、非常に支援が難しいという情報が寄せられました。こうした状況のなか、20日には、日本ユニセフ協会スタッフが福島県災害対策本部などを訪問し、教育などの分野での支援について、また翌21日には、県支部（現：福島県ユニセフ協会）関係者と改めて支援の可能性について各分野の専門家とともに協議を重ねました。



3月18日、東日本大震災緊急募金の受付と支援活動の概要を説明する日本ユニセフ協会 早水 研専務理事

Column 1 いつも支援してくれている日本だから…



© 日本ユニセフ協会 2011/K.Goto

日本ユニセフ協会には、震災直後から、世界各地のユニセフの現場で活躍している日本人スタッフのみならず、その上司からも、「何かできないか?」といった電話やメールが入り続けました。

一日に数百人もの子どもたちの命が失われているような開発途上国でのユニセフの活動に、日々欠くことができない役割を果たしているスタッフを、それでも東日本大震災の被災地支援に送り出してくれたユニセフ。「いつも日本の方々から大きなご支援をいただいているから」「困った時はお互いさま」（アフリカのユニセフ現地事務所代表のメールより）という気持ちが、世界中のユニセフの現場で働くスタッフの間に広く共有されていたからなのです。

緊急時の保健・医療福祉支援体制

日本ユニセフ協会は、震災直後から被災地での救命救急の医療支援を展開し、被災者の救済に全精力を注ぎました。4週間を過ぎた頃からは、妊婦や乳幼児、高齢者を含む災害弱者に対する中長期的な保健・医療・福祉活動にニーズが移行し、それとともない当協会の支援もシフトしました。

地域保健医療は、市町村が中心となった各医療機関の調整・連携機能を回復させることが必要でした。その要となるのは市役所や町役場、保健医療の現場を担う人々ですが、被災地では役所や役場自体が全壊し、保健師などが死亡・行方不明となった地域もあります。また、巡回訪問をする自動車や妊産婦、要介護者などの情報を入れたコンピュータなど、業務執行に必要なものが失われたところもありました。

このような状況に対し、当協会は県や市町村に技術的、物的、資金的支援を行い、アクセスの悪い避難所の現状調査、栄養不足に対する補助食品やビタミン強化米の配給、保健・医療・福祉サービスの連携協力体制の強化、予防接種、乳幼児・妊産婦健診を含む保健サービスの早期復



3月19日、宮城県に到着した支援物資を満載したトラック

旧に協力しました。そして、現在でも、現場で活躍する医療従事者がよりスムーズに活動を進めていけるように支援活動を続けています。

赤ちゃん一時避難プロジェクト

宮城県南三陸町、福島県内で福島第一原発事故の影響下にある地域および福島県の被災家族が避難している東京や埼玉の避難所での生活を余儀なくされていた母子のために、NPO法人災害人道医療支援会（HuMA）と連携し、新潟県南魚沼郡湯沢町のホテル エンゼルグランディア越後中里温泉に一時避難場所を提供し、医療保健活動や母子の心のケアを行う活動を支援しました。

母子ホットラインの開設

4月13日、日本ユニセフ協会は、被災地のお母さんと赤ちゃんを応援するために、母乳育児を含む乳児栄養の相談を受け付ける無料ホットラインを設置しました。また、乳児栄養に関する適切な情報を広め、被災地における母子のためのやさしい環境づくりに役立ててもらうために、「みんなで子育て」ポスターとパンフレット「ふれあいブック」を作成しました。



これらはユニセフ東京事務所、母乳育児団体連絡協議会、災害時の母と子の育児支援共同特別委員会の協力により実現したものです（ホットラインは5月31日に終了）。



パンフレット「ふれあいブック」

子どもにやさしい空間の活動

自然災害などの被災地では、避難生活を送る子どもたちがストレスや恐怖心を抱えてしまうことが多く、心のケアが重要です。日本ユニセフ協会は、震災直後から子どもたちの心のケアを目的に、「子どもにやさしい空間（Child-Friendly Space）」の設置に取り組みました。

子どもたちが安心できる場所を確保するというこのイニシアティブは、被災地の自治体、教育委員会、学校、日本ユニセフ協会の協定地域組織や協力団体と連携して進められました。また、国際基準に則った「ボランティア行動規範」（P.11参照）の周知活動やボランティアへのトレーニングも実施しました。

「子どもにやさしい空間」の運営には、被災地の大学生や中高生のみなさんが、ボランティアとして参加。現在は、地元生協をはじめとするボランティアの方々による子育て支援の一環として、より多くの場所へと広がりつつあります。



©日本ユニセフ協会/2011/Graham



©UNICEF/2011/Nimodo

- 1 「子どもにやさしい空間」で子どもと一緒に遊ぶ、大学生ボランティア
- 2 避難所に設置された「子どもにやさしい空間」で、人形遊びをする女の子

教育支援



バック・トゥ・スクール

日本ユニセフ協会は、学校再開のための支援として「バック・トゥ・スクール（学校へ戻ろう）」キャンペーンを展開してきました。4月初旬から5月末までに宮城県内の小中学生6,906人分、岩手県内の小中学生17,152人分、福島県内の小中学生1,930人分のノートと文房具のセットを届けました。

4月6日、ユニセフ物資センター（コペンハーゲン）から、児童用のリュックサック型通学かばんが成田空港に到着。同日中に宮城県に運ばれました。このかばんには、宮城県内で学習に必要な文房具やノートが詰められ、各小学校で配布されました。

また、学用品の支援には、日頃からご支援くださっている企業や団体、ボランティアが大きな協力を寄せてくださいました。4月の初旬には、岩手県内の小中学生約17,000人分の文房具やノートを各学年ごとに仕分けし、一人ひとりに手渡せるよう個別に袋詰めする作業が岡山県で行われ、岡山、広島、香川、愛媛各県のユニセフ協会からのべ105人のボランティアが駆けつけました。

当時、被災地では全国から届く支援物資の仕分けもままならない状況にあり、子どもたちの手元に迅速かつ確実に必要な学用品を届けるためには、こうしたきめ細かな事前の仕分け・梱包作業が必要不可欠でした。



1



2

- 1 文房具セットを受け取った久慈市立長内小学校の子どもたち
- 2 岡山県内の工場で、学年に合わせて必要な文房具を仕分けするボランティア

児童や生徒への文具類の支援と同時に、被災校にはコピー機やプリンター、パソコンなどのOA機器が提供され、授業の再開に役立てられました。その後も、体操着、書道セット、裁縫道具、リコーダー、算数セットなど授業に必要なさまざまな学用品や副教材、備品や機材が、岩手、宮城、福島各県の教育委員会や学校からの要請に基づいて提供されました。8月末までに「バック・トゥ・スクール」のために支援された物資の総額は3億円以上（輸送費を含む）となりました。

女川町で入学式と始業式を開催

4月12日、東日本大震災の沿岸部の被災地で第1号となる入学式と始業式が、宮城県女川町の第二小学校で行われました。当初、式は4月8日に執り行われる予定でしたが、7日深夜に発生した宮城県沖を震源とするマグニチュード7.4を観測した余震の影響で、4日遅れの開催となりました。

女川町は、震災被害の大きかった地域のひとつですが、日本ユニセフ協会は「子どもたちのために何よりも教育を優先したい」という教育委員会や保護者の気持ちに応え、入学式と始業式の準備を昼夜なく進めました。



子どもたちが長く待ちわびた入学式と始業式

南相馬市の小学校に仮設トイレを提供

大震災や福島第一原子力発電所の事故の影響で、南相馬市内の小学校22校は4校に統合されました。4校のうちの1校である八沢小学校の震災前の児童数は120～130人程度でした。しかし、5月上旬には約3倍の304人に増加したため、トイレが極端に不足してしまいました。そこで、日本ユニセフ



設置された仮設トイレ

協会は、統合された小学校に、水洗の仮設トイレ20基を設置しました。また、トイレの他にも移動式黒板やロッカーを提供し、子どもたちが学びやすい環境づくりに尽力しました。

岩手、宮城両県の中高総体開催を支援

日本ユニセフ協会は、被災した岩手、宮城両県沿岸地域の中高生が、他の地域と同じように全国大会をめざし、これまで積み上げてきた練習の成果を発揮することができるよう、第58回岩手県中学校総合体育大会（7月16日～18日）と第63回岩手県高等学校総合体育大会（5月20日～6月19日）、第60回宮城県中学校総合体育大会（7月22日～24日）と第60回宮城県高等学校総合体育大会（5月23日～7月10日）の支援を実施しました。

インターハイ予選を兼ねる高校総体は、スポーツをする高校生にとってはインターハイへの切符を手にするための大切なイベントです。しかし、震災後、被害の大きかった沿岸地区の学校の参加が厳しい状況にありました。大会の参加・活躍は子どもたちの夢であり、被災した子どもたちのみならず、周囲の人々に勇気を与えてくれる機会と捉え、日本ユニセフ協会は被災地の子どものための大会参加に関わる移動費・宿泊費用などの補助を通じて、中高総体の開催を支援しました。

こうした全国大会予選を兼ねる中高総体への参加は、被災した選手たちの心のケアにつながるとともに、被災地における明るいニュースになりました。



1



2

- 1 岩手県高校総体開会式には、84校・約16,000人の高校生アスリートたちが参加
- 2 各競技、たくさんの応援のなかで開催されました

バック・トゥ・幼稚園／保育園

被災地の小中学校の多くは、大震災発生からあまり間を置かずに再開を果たしました。一方で、未就学児・園児や放課後保育を必要としている子どもたちの支援は遅れていました。こうした状況をふまえ、日本ユニセフ協会は「バック・トゥ・スクール」プロジェクトに引き続き、被災した未就学児への支援として「バック・トゥ・幼稚園／保育園」プロジェクトを実施しました。

大きな災害を経験し、ストレスや恐怖を抱えている子どもたちには、一刻も早く心のケアを始めることが重要でした。



ユニセフの物資供給センターから被災地に届けられた「箱の中の幼稚園」

そこで、ユニセフ物資供給センター（コペンハーゲン）から取り寄せたぬいぐるみやお絵かきセット、知育玩具などが入った「箱の中の幼稚園」、そして遊具やスポーツ用品が入った

「レクリエーション・キット」を避難所や被災地の幼稚園・保育園に提供しました。

こうした活動と並行して、ボランティアたちによる保育園などの施設の泥出し作業も連日続けられました。また、後に現場のスタッフの間で、「三河屋プロジェクト／御用聞きプロジェクト」と呼ばれるようになった、幼稚園・保育園への個別訪問活動が開始されました。活動再開のために必要な、ふとんや食器、空気清浄機やおもちゃ、調理器具や冷蔵庫など、それぞれの被災状況とニーズに合わせたきめ細やかな支援を実施しました。そうしたなか、震災から5週間が経過した4月15日、岩手県陸前高田市の広田保育園では、保育が再開。約80人の子どもたちが登園しました。

保育園の再開は、被災した家族や子どもたちにとって大変重要な役割を担っています。保育サービスが再開することによって、家族は安心して保育園へ子どもを預け、仕事を再開したり、家の片付けに専念することができます。一方子どもたちは、親しんできた保育士や友だちと一緒に時間を過ごすことで安心できます。しかし、避難生活が続くなか、家や所有物を失ったり、家族を亡くした保育士の身体的および心理的負担が蓄積していることが問題視されています。預かっている子どもへの責任感が強い保育士たちは、容易には休暇を取れない状況が続いています。

岩手県内では、東京都社会福祉協議会保育部会保育士会（東社協保育士会）の協力を得て、東社協保育士会の会員もしくはその他の保育士を被災地の保育園へボランティアとして派遣し、応急的な保育補助支援を行っています。岩手県の山田町、大槌町では、7月1日から8月末までの2ヵ月間で31人の保育士が、のべ119日分の保育補助業務に従事しました。



© 日本ユニセフ協会 2011/K.Goto

大槌町の吉里吉里保育園は津波によって全壊したため、お寺を間借りして保育を行ってきました

保育園・幼稚園の園舎再建プロジェクト

日本ユニセフ協会は、備品の提供に続き、地震や津波で全半壊した保育園や幼稚園などの施設の大規模な修繕や、仮設・恒久園舎の建設などの支援を実施することを決定。石巻市、気仙沼市、南三陸町、山元町（以上宮城県）、大槌町（岩手県）、いわき市（福島県）の保育園や幼稚園、学童保育施設など計13施設に対する支援を開始しました。

被災した保育園や幼稚園の再建支援プロジェクトの実施にあたって、3つの基本理念（1.子どもの参画・子ども中心の環境づくり、2.あたたかみとぬくもりを感じる保育空間づくり、3.自然・地域とのつながりづくり）を定め、園の先生方、保育士、保護者の方々、そして、子どもたちの要望を取り入れながら再建に向けた取り組みを進めています。

6月1日には、こうした支援によって完成したプレハブの仮園舎を使って、大槌町の大槌保育園が約80日ぶりに保育活動を再開。早朝からお母さんやお父さんと一緒に続々と登園しました。子どもたちに、園長先生は、「先生たちもみなさんと同じようにこの日を楽しみに準備していました。地震、津波のために、もう会えなくなってしまったお友だちがいますが、いつも見守っていてくれます。みんな一生懸命遊んで、お友だちと仲良くして過ごしましょう」と挨拶しました。

福島県いわき市の北部に位置する、いわき三宝保育園は、地震によって園舎は激しく損壊。壁は傾き、床には無数のひび割れが生じました。行政当局による全壊認定を受けながらも、ほかに保育場所がないため、1階にある比較的安全な部屋で、約90人の園児が保育を受けていました。

こうした状況を受け、日本ユニセフ協会は、仮設園舎の建設を支援することを決定しました。いわき市による放射能汚染が懸念されている土壌の入れ替え作業が完了した後、9月中には仮設園舎が完成する予定です。



1



2

1 再開された保育園で紙芝居のお話を聞く子どもたち

2 建設中の仮設園舎

©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto



Column 2

「ユニセフちっちゃん図書館」プロジェクト

ほんた



大地震発生から2週間後の3月25日、日本ユニセフ協会は、被災地の子どもたちに「絵本」と「笑顔」を届ける「ユニセフ ちっちゃん図書館」プロジェクトをスタートしました。

このプロジェクトでは、JBBY（日本国際児童図書評議会）と協力しながら、全国のみなさまから贈られた本を、絵本や紙芝居を中心とした「乳幼児セット（0歳～6歳）」と、児童書中心の「小中学生セット（7歳～14歳）」の2種類のボックスにまとめ、「ユニセフ ちっちゃん図書館セット」として、被災地の避難所や幼稚園、保育園、小学校などへ届けています。8月末現在、約27万冊が届けられています。



ユニセフハウスの駐車場に積み上げられる、全国から届いた本の山



大船渡市の大船渡中学校の避難所で「ユニセフちっちゃん図書館セット」を受け取る子どもたち

5月10日、宮城県牡鹿郡女川町では「女川ちゃっこい絵本館」がオープンしました。もともと女川町では、今年6月のオープンをめざして、「絵本図書館」の準備が進められていました。しかし、3月11日の大津波によって4万冊の絵本が流されてしまいました。そこに寄せられたのが、「ユニセフ ちっちゃん図書館」プロジェクトや、他の市民団体、企業などから寄贈された約5,000冊の絵本でした。

また、福島県双葉町の被災者の避難所となっている埼玉県加須市の旧騎西高校の体育館の一角にも「ふたばひろば」が設けられました。ちっちゃん図書館の本やおもちゃが並べられ、「子どもにやさしい空間」ができました。

保健・栄養支援



乳幼児健診の再開

乳幼児健診や予防接種などの保健事業は、赤ちゃんを病気から守り、健やかな成長を見守るために必要不可欠です。日本ユニセフ協会は、行政による母子保健サービスが一日でも早く受けられるよう、国内の医療専門家団体の協力も得ながら、岩手、宮城両県の被災地に住む乳幼児を対象とした健診再開の支援を行いました。乳幼児健診用の身長計や体重計、診察台、ワクチン保冷庫のほか、地域の自治体の保健担当者が移動する際の車や原付バイクなどを、被災各地の保健当局に提供しました。こうした支援の結果、6月までに両県では18の市と町で、27,000人を対象とした乳幼児健診が再開されました。

4月19日には被災後初めてとなる乳幼児健診が岩手県陸前高田市で実施されました。朝からの冷たい雨にも関わらず、健診会場となった公民館には予定時刻より早くお母さんと赤ちゃんたちが集まり始めました。待合スペースでは、赤ちゃんを胸に抱いた同じ地域に住むお母さんたちが、互いの無事を確認して、涙ぐむ姿も見られました。



1



2

- 1 震災後初めての健診を受ける陸前高田市の赤ちゃん
- 2 再開された予防接種の様子

その後、陸前高田市では本格的な乳幼児健診と予防接種活動が再開され、8月末までに243名が予防接種（MR／三種混合／BCG）を受け、141名が健康診断（歯科を含む）を受診しました。「やることはいつもと同じですが、「ここまで来たんだなぁ」と思いました。ひとつ実現できれば、その次、またその次とつながっていきます」と予防接種を担当した医師は、感慨深げに語りました。

岩手、宮城両県での栄養支援プロジェクト

日本ユニセフ協会は、震災によって悪化した子どもたちの栄養状況の改善を支援する活動を岩手、宮城両県で実施しています。

5月17日より、被害の大きかった岩手県陸前高田市、大槌町、山田町の保育園、幼稚園25施設で約830人の園児を対象に、避難生活で偏った食事による栄養不足を補う補食支援を開始しました。地域の生活協同組合と連携し、栄養士が栄養バランスを考慮して選んだ栄養価の高いおやつと肝油をほぼ毎日、各施設に配送しています。

また、被災地の中でも学校給食の提供が特に厳しい状況にあった宮城県女川町の要請を受け、地震による被害で使えなくなった給食施設の修繕を支援しました。夏休み明けの学校再開日である8月22日に給食施設が再稼働し、女川町のすべての小中学生に完全給食を提供できるようになりました。女川第一中学校の大内俊吾校長は、「みんなでおいしく給食を食べることは心のケアにつながります。子どもたちの笑顔を見られることが何よりうれしいです」と語りました。



楽しそうに給食を食べる
女川第一中学校の生徒たち

子どもの心理社会的ケア・ 子どもの保護



子どもたちに最善の利益を

震災発生直後から、マスコミでも多く取り上げられた「孤児」の問題。4月10日、日本ユニセフ協会とユニセフ東京事務所は、子どもの権利条約をはじめとする国際条約と日本政府の法的枠組みを基軸に、子どもたちの最善の利益を訴える「東日本大震災孤児の代替的養護に関する見解」を発表しました。

東日本大震災で両親もしくは保護者を失った子どもの支援の動きが広がりつつあるなか、子どもたちの声をきちんと聞き、それぞれの子どものニーズを把握した上で「子どもたちにとって最善の利益」となる対応をしていくことが不可欠です。当協会とユニセフ東京事務所は、孤児の代替的養護に関し、次のことを優先するよう推奨しました。

1. 近親者、親戚を探し、状況の把握に努める
2. 親族里親の可能性を打診する
3. 子どもの友人・人間関係が維持できるよう、同地区での養育里親の募集を行う

これらは、「子どもの権利条約」など*に基づく考え方で、子どもたちの被災以前の友人や地域へのつながりを重視しています。

世界中のユニセフの現場で蓄積されてきた代替的養護と災害時の孤児保護の知見を活かし、子どもにとってよりやさしい環境を整えていけるよう、政府や地方自治体、NPOを含む市民社会の人々と協力しながら、震災孤児への支援を今後も展開する予定です。

*「子どもの権利条約(20条)」、「子どもの権利委員会の最終見解(CRC/C/JAPAN/CO/3-52~55)」、「子どもの代替的擁護に関する国連総会決議(A/RES/64/142)」、「平成20年に改正された児童福祉法」、「厚生労働省里親委託ガイドライン」など。岩手県では、この考え方に基づいた孤児に対する代替的擁護の対応が進められ、93人の孤児のほとんどが親族里親委託となる見込みです。

ボランティア行動規範の策定

日本ユニセフ協会では、被災地の子どもたちの保護と安全を確保するため、日本ユニセフ協会のボランティアのみならず、被災地で活動するすべてのボランティアとも共有できる「ボランティア行動規範」をまとめました。「すべての子どもたちに平等に接する」「子どもと閉鎖的な空間で二人きりになることは避ける」「子どものプライバシーを守る」など、被災地で子どもと接するボランティア活動にあたり守らなければならない内容をまとめ、被災地の社会福祉協議会と災害ボランティアセンターへも周知への理解と協力を求めました。

7月末現在、岩手県内では、災害ボランティアセンターが設置されている、6市町(宮古市、釜石市、陸前高田市、大船渡市、山田町、大槌町)の理解が得られ、連名で行動規範の書面がボランティアの方々に配布されています。

未就学児の心のケア～プレイセラピー講習の実施

日本ユニセフ協会は、震災直後から被災した子どもたちへの心のケアの重要性を訴え、その支援に取り組んできました。その一つに幼稚園や小学校の先生、保護者を対象にしたプレイセラピー講習の実施があります。

大人は恐怖心を言葉などで伝えることができますが、言語能力が十分に発達していない子どもたちは、そうした恐怖心を心のなかに閉じ込めてしまう傾向にあります。プレイセラピーとは、安全な環境と遊び道具を使い、そうした子どもたちが遊びを通じて、自分の思いや気持ちを外に伝えられるように手助けする活動です。子どもたちはこうした活動を通じ、ストレスを軽減させ、心を回復させていきます。

8月末現在、岩手県で297人、宮城県で765人がプレイセラピー講習に参加し、それぞれの教育・保育の場で、子どもたちの心のケアが行われています。

福島県臨床心理士会との取り組み

岩手、宮城両県で、未就学児を対象とした心のケア支援を展開してきた日本ユニセフ協会は、6月下旬より、福島県でも心のケアに関する支援を開始しました。



プレイセラピー講習の様子

福島県内では子どもたちの心のケアのために、スクールカウンセラーなどによる支援が既に始まっていましたが、未就学児への取り組みはあまり進んでいませんでした。そこで、当協会は福島県臨床心理士会に本事業の実施を委託しました。その結果、県内外の臨床心理士をはじめとした専門家が、福島県内の被災地および被災者を受け入れている地域を巡回。乳幼児健診の会場や仮設住宅などを訪問し、8月末までに、子ども236人、大人254人が面談・相談を受けました。

「ユニセフ こどもバス遠足」

日本ユニセフ協会は、いまだに瓦礫の残る岩手県沿岸地域で暮らす子どもたちに、自然のなかでのびのびと遊べる機会を提供しようと、5月3日～8日のゴールデンウィーク期間中、「ユニセフ こどもバス遠足」を実施しました。5日間を通じて11地域（陸前高田市、釜石市、大船渡市、大槌町、宮古市、山田町、普代村、田野畑村、岩泉町、野田村、久慈市）から約1,000人の参加者があり、用意された5つのコース（遠野ふるさと村、盛岡動物公園、安ヶ沢カタクリ群落散策、いわて子どもの森、宮沢賢治童話村）のいずれかのバス遠足を楽しみました。

実施にあたっては、「ユニセフ こどもサポーター」として県内外の多くのボランティアに協力していただきました。ボランティアたちからは「子どもたちの元気に遊ぶ姿を見て少し安心しました」「今までユニセフ募金などに協力してきたのですが、こうした活動に参加することができてよかったです」といった声が聞かれました。

また、6月5日と11日には「ユニセフ こどもバス遠足」第2弾を実施。第1弾と同様、子どもたちの笑顔がたくさん見られました。



©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto

遠野ふるさと村では、もちつきを楽しみました

「おもいっきり!そとあそび」プロジェクト

福島県ユニセフ協会と連携し、5月から「おもいっきり!そとあそび」プロジェクトをスタートさせました。このプロジェクトは福島市内の保育園と幼稚園の子どもたちを、安心して思いっきり遊べる場所へ、定期的に招待するものです。目的地は福島県内だけでなく、山形県などにも設定された20ヵ所以上の多様なコースで、「からだをうごかそう」「どうぶつとあそぼう」「たくさんまなぼう」の3つのコンセプトをもとに、バラエティーに富んだ“遊び”が用意されました。

第1回目は16日に実施され、福島市内にある三育幼稚園の園児178人と14人の先生がバス5台に分乗して、福島市街からバスで30分ほどの場所にある緑豊かな「四季の里」へ向かいました。

子どもたちは芝生の上で走ったり、転がったり、おにごっこをしたり、元気に遊びました。園長先生は、「本当に水を得た魚のよう。原発事故があって以来、子どもたちを外で遊ばせることはできませんでした。ストレスはたまる一方でした。子どもたちにとってマスクを外して、思いっきり外で遊ぶことがどれ

だけうれしくて楽しいことかあらためて実感するとともに、私たち大人まで元気をもらいました」と語ってくれました。

本プロジェクトは、現在も継続中で、8月24日までにのべ32,259人が参加しています。



©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto



©日本ユニセフ協会/2011/K.Goto

- 1 たくさんの親子が外遊びを楽しみました
- 2 青空の下、マスクを外して食べるお弁当。子どもたちの笑顔がたくさん見られました

Column 3 「まちづくりに子どもの視点を」

被災地では、町の復旧・復興が進められています。被害状況によって進展に違いはありますが、どの地域も、国と県が策定する枠組みに沿って復興計画を企画しています。こうしたなか、日本ユニセフ協会は、子どもたちの声を復興計画に積極的に取り入れられるよう、アドボカシーおよび技術的支援を実施しています。

具体的には、こども環境学会主催の被災地復興プラン国際提案協議への協力をはじめ、岩手県大槌町における「こどものための復興青空座談会」の開催、福島県相馬市において、子どもの声を市の復興計画に反映させるために、教育委員会が5ヵ年計画として取り組んでいる「ふるさと相馬こども復興会議（仮称）」の企画・構想などです。また、宮城県内の被災地の自治体とも、具体的な取り組みに向けた協議を始めています。

大槌町吉里吉里の吉祥寺本堂では、保育士を含む地域の人々が集まり、さまざまな視点から子どもたちのための復興支援を考える住民集会が開かれました

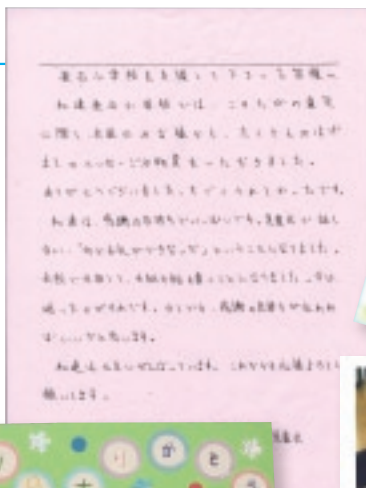


被災地から届いた子どもたちの たくさんの「笑顔」と「ありがとう」

支援を受けた子どもたちから、
かわいいメッセージが
寄せられました。



釜石市立▶
釜石小学校
(岩手県釜石市)



▲カトリック児童福
祉会 川渡カトリ
ック保育園 (宮城県
大崎市)



▲中央第1・2・3児童クラブ (千葉県旭市)



◀巨理町立荒浜保育所
(宮城県巨理町)



◀いちご保育園
(宮城県
多賀城市)



Column 4 Tegami プロジェクト

3月11日の東日本大震災以降、世界の子どもたちから、東北の子どもたちに向けて、たくさんの励ましや応援の手紙が日本ユニセフ協会に届きました。その数は、2,000通(約30カ国)以上になります。

当協会では、こうした想いの込められた手紙を被災地の子どもたちに届けるとともに、手紙を受け取った子どもたちが書いた返事を各国に届けるTegami (テガミ) プロジェクトを7月15日からスタートしました。海外の子どもたちとの関わりを通して、被災地の子どもたちが今後の夢や可能性を大きく持てるように、また、そのつながりがずっと続くようにとの願いを込めたプロジェクトです。

本プロジェクトの第1弾として、ケニアの小学校からの手紙を、宮城県仙台市の中野小学校の子どもたちの元に届けました。第2弾はアフガニスタンの高校生からの手紙を福島県の湯本高校の生徒たちに、第3弾はアイスランドからの手紙を岩手県の釜石保育園に届けました。そして、震災以降、離れ離れになってしまった同級生と再会する機会として8月に福島県猪苗代町で行われた双葉町の「児童生徒再会の集い」では、米国の子どもたちが書いた手紙を双葉中学校の生徒たちに届けました。

手紙を受け取ったそれぞれの学校や保育園からは、喜びにあふれた返事が届きました。



韓国から届いた手紙



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Goto



アフガニスタンの高校生から寄せられた手紙を受け取る福島県湯本高校の生徒たち



© 日本ユニセフ協会 / 2011 / Grehan

未来を創る子どもたちへの エール



アンソニー・レーク ユニセフ事務局長が 宮城県の被災地を訪問

ミレニアム開発目標 (MDGs) フォローアップ会合出席のために来日したユニセフのアンソニー・レーク事務局長は、会合後の6月4日、黒柳徹子ユニセフ親善大使、アグネス・チャン日本ユニセフ協会大使とともに、宮城県沿岸部の被災地を訪問しました。

震災による津波の影響で多くの死者・行方不明者が出ている宮城県女川町では、小学校と中学校、また体育館に設置された避難センターを訪れて、子どもたちを含む多くの被災者の話に耳を傾けました。「黒柳大使やアグネス大使が、子どもたちを含む避難を余儀なくされた人々に話しかけたり、歌を歌ったりしている時、笑っている人もいれば、泣いている人もいることに気がつきました。これは、とても自然なことだと思います。笑顔は、その人々の強い精神や勇気を反映しているものですし、泣くということは、このような大災害において人間的で自然なことなのです」とレーク事務局長は語りました。そして、「世界中のユニセフ協会を通じて寄せられている支援に支えられ、被災地の子どもたちが置かれた状況に良い変化をもたらしている日本のユニセフファミリーのスタッフ一人ひとりを誇りに思います」と付け加えました。

潘国連事務総長が福島県の高校生と対話

8月8日、潘基文国連事務総長が福島県の高校生との対話集会に参加しました。本イベントは、潘事務総長の来日に合わせ、さまざまな困難に直面している福島の子どもの声を世界に発信できる機会を作りたいとの思いから企画されました。潘事務総長は、「甲子園での福島代表第1回戦通過、なでしこジャパンのワールドカップ優勝おめでとうございます。同じアジア人として誇りに思います。東日本大震災は、非常に大きな災害をもたらしました。しかし、世界が、国連が、応援しています。日本は必ずこの苦難を乗り越えられます」と被災地の子どもたちを激励しました。



福島県の高校生に激励のメッセージを伝える、
潘 基文国連事務総長



- 1 女川町立第一中学校女子ソフトボール部の練習に参加し、選手を励ました
- 2 女川町立第二小学校に設置された「女川ちゃっこい絵本館」で子どもたちと交流をしました

ユニセフから応援派遣された 日本人スタッフ

開発途上国で活動しているユニセフの日本人専門家12人が、東日本大震災の緊急・復興支援活動を応援するために、世界中から駆けつけました。

泉紀子(ナイジェリア事務所)、井本直歩子(ハイチ事務所)、大澤祐子(イエメン事務所)、籠島まり子(ホンジュラス事務所)、加藤正寛(アフガニスタン事務所)、國井修(ソマリア事務所)、小林葉子(スリランカ事務所)、竹友有二(アフガニスタン事務所)、野田真紀(カンボジア事務所→イラク事務所)、福原美穂(ニューヨーク本部)、水野谷優(ケニア事務所)、安田直史(ベトナム事務所) 以上12人、50音順

Messages



©日本ユニセフ協会 / 2011 / K.Shindo



ユニセフ東京事務所
代表 平林 国彦

3月11日、金曜日の夜。未だ大震災の被害の全体像が分からないなか、どうか一人でも多くの方々が生き延びて欲しい、と心から祈っていた。傷つき、不安な思いをしているだろう子どもたちは、いったいどうしているのだろう。私たちに、何ができるだろうか。

日曜日の早朝4時。ようやくつながるようになった電話で、ユニセフのニューヨーク本部との緊急会議が行われ、その場で日本ユニセフ協会が行う緊急支援活動への「全面的な支援」が決定された。緊急支援の経験が豊富なユニセフ日本人スタッフに、応援を要請するメッセージを書きながら、被災した子どもたちのことを思った。

子どもたちの多くは、学校や街頭で、世界の子どもたちのために、募金活動などに熱心に取り組んでくれていた。「今度は、私たちが日本の子どもたちに恩返しをする番です。いつでも行ける準備を整えます」。すぐに返信してくれたある日本人職員のメールに、胸が熱くなるとともに、生き抜いてくれた子どもたちに対し、我々には大きな責任があると感じた。

この6ヵ月レポートに込められたメッセージは、子どもたちにとって最も良いことを、これからも実行し続ける、という私どもの決意である。私どもの活動を支援して下さる方々や協同して支援にあたって下さっている協力団体の方々の思いを真摯に受け止め、今も困難な中にあり、声を出そうにも出せない子どもたちの声を聞き取り、一刻も早い復興に、かつ子どもにやさしい復興に貢献できるよう、常に努力を重ねていきたい。



4月8日、陸前高田の仮庁舎に到着する
ユニセフの平林国彦代表(左)と安田直史(中央)



ユニセフ・ソマリア事務所
保健・栄養・水衛生事業部長
國井 修

派遣先:宮城県(3月18日～5月22日)

初めて被災地の現場に足を踏み入れた時、声を失い、涙が溢れ、全身から力が抜け落ちました。これまでスマトラ島、ミャンマー、バングラデシュなどの大水害の惨状を見てきましたが、まさかそれを上回る凄惨な光景をわが母国日本で目の当たりにするとは…。

私は被災地入りして間もなく、村井知事からの委嘱で宮城県災害保健医療アドバイザーとなりました。被災地の全体像を把握し、ニーズを分析し、必要な助言および物的支援を行うことが私の役目でした。また、石巻市の災害復興計画に際し、「石巻市の復興、街づくりには夢作り、人作り、絆作りの3つが重要」という提言をさせていただきました。

復興と街づくりには、みんなで夢を描き、特に次世代を担う子ども・若者の声を反映し、それを具体的な戦略に落とし、復興計画に組み入れていくことが重要です。そして、街づくりをするのも人なら、その街で過ごしていくのも人で、特に地元の若い世代を育てていくことが重要だと考えます。さらに、街づくりには絆づくりが重要です。それは避難所や仮設住宅の中での助け合い、つながり合いからはじまります。「Build Back Better」を実現させるために、世代を越えて交わり、支援しあえるようなコミュニティの再建、助け合い、つながり合いを促進すべきです。

現在、日本での支援活動を終えて、ソマリア支援のためアフリカに戻っています。ソマリアにも、状況は異なりますが、紛争で傷つき、栄養不良で倒れ、感染症に苦しむ人々など、支援を必要としている人がたくさんいます。一刻も早い日本の被災地の復興を祈りながら、東日本大震災での死者・行方不明者



みやぎ生活協同組合での協議の様子

数と同じ、2万人以上の子どもたちの命が世界で毎日失われている現実も忘れてはならないと思っています。

東日本大震災緊急支援活動 6ヵ月収支報告

【収入】 2011年3月14日～8月31日

(単位:円)

	金額
日本ユニセフ協会 国内事業費より	100,000,000
日本国内で寄せられた募金 ^{*1}	2,199,509,786
海外のユニセフ協会を通じて寄せられた募金 ^{*2}	1,071,007,200
合計	3,370,516,986

※1 海外の個人・企業・団体等から直接送金された募金を含みます。

※2 ユニセフ協会(ユニセフ国内委員会)は、世界36の先進国・地域に設置されており、各国内で民間からのユニセフ募金の窓口となっています。2011年3月以降、東日本大震災に対し、14のユニセフ協会(オーストラリア、オーストリア、カナダ、チェコ、フランス、ドイツ、ギリシャ、香港、ハンガリー、アイスランド、イスラエル、韓国、スイス、米国)を通じて募金が寄せられました。

【支出】 2011年3月14日～8月31日

(単位:円)

項目 / 内容	支出済額	支出確定額 ^{*9} (～2012年3月)	支出予定額 ^{*10} (～2012年3月)	支出予定額 ^{*10} (2012年4月～2016年3月)	合計
A. 緊急支援活動費					
1. 緊急支援物資の提供	物資調達支援	217,813,492	0	0	217,813,492
活動報告 P.5 ～	技術支援 ^{*3}	6,880,709	0	0	6,880,709
	小計	224,694,201	0	0	224,694,201
2. 教育支援	バック・トゥ・スクール	292,215,819	59,500,000	10,000,000	361,715,819
活動報告 P.7 ～	バック・トゥ・幼稚園 / 保育園	69,011,174	5,000,000	0	74,011,174
	保育園・幼稚園 園舎再建・修理	23,493,334	1,258,000,000	175,000,000	1,456,493,334
	中高総体	35,293,648	48,540,000	0	83,833,648
	技術支援 ^{*3}	9,976,706	10,268,000	5,280,000	25,524,706
	小計	429,990,681	1,381,308,000	190,280,000	2,001,578,681
3. 保健・栄養支援	健診再開・物資調達支援	15,499,823	5,000,000	0	20,499,823
活動報告 P.6、10	栄養支援プロジェクト	5,891,578	17,842,200	0	23,733,778
	母子保健(母乳促進、妊婦支援、ワクチン、施設整備等)	623,615	0	460,000,000	460,623,615
	教育施設における給食、補食支援	15,664,120	1,000,000	0	16,664,120
	技術支援 ^{*3}	76,033,025	7,650,000	2,640,000	86,323,025
	小計	113,712,161	31,492,200	462,640,000	607,844,361
4. 子どもの心理社会的ケア	バス遠足、おもいっきり!そとあそびプロジェクト	55,601,701	34,500,000	0	90,101,701
活動報告 P.9、11	ちっちゃな図書館	23,618,630	0	1,000,000	24,618,630
	物資調達支援	137,352	0	0	137,352
	資料等作成 ^{*4}	1,338,556	0	0	1,338,556
	技術支援 ^{*3}	34,179,774	24,910,000	10,000,000	109,089,774
	小計	114,876,013	59,410,000	11,000,000	225,286,013
5. 子どもの保護	アドボカシー活動^{*5}	301,000	8,000,000	0	9,301,000
活動報告 P.11	資料等作成 ^{*4}	629,212	0	0	629,212
	技術支援 ^{*3}	4,352,774	7,000,000	5,000,000	36,352,774
	小計	5,282,986	15,000,000	5,000,000	46,282,986
6. 子どもにやさしい復興計画	アドボカシー活動^{*5}	389,245	0	1,000,000	11,389,245
活動報告 P.12	子どもに関連する復興(遊び場、公園整備等)	0	17,000,000	0	97,000,000
	技術支援 ^{*3}	171,523	0	4,000,000	24,171,523
	小計	560,768	17,000,000	5,000,000	132,560,768
7. 活動報告・広報啓発	報告会運営・報告資料作成^{*6}	22,581,304	25,000,000	0	52,581,304
活動報告 P.13	Tegami プロジェクト	3,022,623	500,000	0	3,522,623
	小計	25,603,927	25,500,000	0	56,103,927
	合計	914,720,737	1,529,710,200	673,920,000	3,294,350,937
B. 活動全般に関わる現地運営^{*7}					
	現地事務所賃借料・通信費・交通費等	30,270,853	0	15,411,707	50,682,560
	スタッフ・ボランティア現地派遣 ^{*8}	17,483,489	0	3,000,000	25,483,489
	小計	47,754,342	0	18,411,707	76,166,049
	総合計	962,475,079	1,529,710,200	692,331,707	3,370,516,986

※3 「技術支援」は、日本ユニセフ協会が事業の遂行にあたり協力協定を締結したパートナー団体(地方公共団体を含む)を通じた支援活動や専門家への業務委託費を含みます。具体的なパートナー団体についてはP.17をご参照ください。

※4 「資料等作成」は、被災者向けの資料作成活動です。

※5 「アドボカシー活動」とは、パートナー団体との連携、調整、情報共有(ホームページ作成、会議、報告会開催等)、また意識啓発や自治体への政策提言等の活動です。

※6 「報告会運営・報告資料作成」には、報告書や印刷物の作成、写真展、ホームページの英文翻訳費、映像・写真記録費用を含みます。

※7 「B.活動全般に関わる現地運営」の支出は、原則として日本ユニセフ協会が活動開始時に事業費から準備した1億円でまかなわれます。

※8 「スタッフ・ボランティア現地派遣」の支出には、滞在費、ボランティア保険等を含みますが、給与は含みません。スタッフとは、ユニセフおよび日本ユニセフ協会の職員を指します。

※9 「支出確定額」とは、すでに支援を届け、支払等事務手続きのみを残す事業、または活動内容と実施金額が確定し、進行中の事業を含みます。

※10 「支出予定額」は、8月末時点での見込み額であり、今後の被災地の状況や活動状況により変わることがあります。

注) 本収支報告は、活動の状況をわかりやすくお伝えするためにまとめたものです。報告期間は、3月の支援活動開始時から8月末までで、日本ユニセフ協会の会計年度と異なります。また、会計年度ごとの日本ユニセフ協会の正味財産増減計算書とは会計科目が異なります。

支援活動を支えてくださったみなさま

今回の東日本大震災の支援活動は、多くの個人・企業・団体のみなさまのご協力なしにはなし得ないものでした。日本、そして海外の多くの方々から、被災した子どもたちのために、多大なる募金をお寄せいただきました。また日本のみなさまには「ちっちゃな図書館」への絵本の提供をはじめ、さまざまなかたちでご協力いただき、深く御礼申し上げます。

物資の入手や物流の困難な時期、日ごろからのパートナーシップの絆のなかで、物資の寄贈や、迅速な調達・物流に協力いただいた企業・団体の方々、支援事業の広報やアドボカシーにプロボノで協力いただいた企業の方々、みなさまに深く感謝申し上げます。

支援活動は、現在もさまざまな専門団体とのパートナーシップのなかで実施されています。また、各県のユニセフ協会は、被災地での支援活動の実施に直接携わっているほか、ボランティア協力など側面支援にも積極的に関わっています。

被災地における支援活動の進捗状況については、ホームページで随時ご報告しております。今後とも支援活動を見守っていただきますよう、心よりお願い申し上げます。

ホームページ：www.unicef.or.jp

ご支援・ご協力のまとめ (2011年8月31日現在)

協力企業・団体 (各項目50音順、法人格名略)

※調達や配送に関し特別協力

物資面でのご協力 (ご寄贈および特別協力)	
【オムツ・衛生用品】	【心のケア】「バック・トゥ・スクール/幼稚園・保育園」関連
● P&G 乳幼児用紙オムツ・お尻拭き、生理用ナプキン	● 明石被服興業 教員用ジャージ、ウィンドブレーカー各種
【飲料水・保健関係】	● アメリカン航空 ネームタグ
● 伊藤園 飲料	● イケア・ジャパン ソフトイ、玩具、遊具、ラグ、子ども用家具
● SIX テレクルスジャパン マスク	● いわて生活協同組合 保育園児おやつ※
● キリン MC ダノンウォーターズ / ダノンウォーターズオブジャパン 飲料水	● キョクトウ・アンシエイツ 小中学生用ノート、文具セット※
● さいたまコープ 牛乳※	● セイバン ランドセル
● サラヤ マスク	● ソニー テレビ、DVD プレイヤー、DVD / CD ソフトセット
● ダノンジャパン ヨーグルト	● タカラトミー ミニカー
● VanaH 飲料水	● 日本手芸普及協会 手作り手提げかばん
● マグネット、抗菌化研、ジユテック、クリーンテクノ、三谷バルブ、HY 抗菌消臭剤	● 日本ニューバッグチェーン、大隈カバン店 ランドセル
● マナテックジャパン 栄養機能食品	● パッチワーク通信社 コンフォートキルト
● ライオン 手指消毒液	● ピープルツリー / フェアトレードカンパニー オーガニックコットンミニタオル
【衣料、靴】	● みやぎ生活協同組合 マスク、文具、救急セット、各種学校用品※
● アキレス 子ども用靴、長靴	【その他】
● イオン 子ども用下着※	● 武田産業・アバンテック 自転車
● コンバースフットウェア シューズ各種	● 日産 四輪駆動自動車
● 東レインターナショナル・ジャパンプラットフォーム 子ども用長袖インナーシャツ	

物流面等での無償協力

● いわて生活協同組合・岩手県学校生活協同組合・岩手県教職員組合	トラック・配送	● みやぎ生活協同組合	トラック・配送
● 日本航空	航空貨物輸送	● 岩手県立大学	ボランティア派遣・配送

支援事業の実施・運営等にご協力いただいている団体、企業等

● 心のケアの研修 福島県臨床心理士会、日本プレイセラピー協会	● 災害対策本部医療 IT システム整備 (宮城) ジェネロテクノロジー
● 「赤ちゃんの栄養」ホットライン 母乳育児団体連絡協議会、災害時の母と子の育児支援共同特別委員会、電通	● 「ユニセフちっちゃな図書館」プロジェクト 日本国際児童図書評議会、電通
● 赤ちゃん一時避難プロジェクト 学齢期の児童と高齢者を抱えた被災家族への診療活動プロジェクト 災害人道医療支援会 HuMA	● ユニセフこどもパス遠足 (岩手) 岩手県北観光、岩手県北バス
● ぽかぽか・ママサロン (妊婦・母親一時避難) プロジェクト (岩手) 日本助産師会	● 「おもいっきり! そとあそび」プロジェクト in 福島 福島青年会議所、福島交通、福島交通観光
● 被災児童とその母親を対象とする医療支援プロジェクト 日本プライマリケア連合学会	● 中学・高等学校総合体育大会 (岩手) 博報堂
● ビタミン B 群欠乏予防のためのビタミン強化米の配布 日本栄養士会	● 保育補助支援プロジェクト (保育士派遣) 東京都社会福祉協議会保育部保育士会
● 乳幼児健診 (岩手) HANDS、博報堂	● アドボカシー活動 子どもの権利条約総合研究所
● 保育園・幼稚園補食プロジェクト (岩手) HANDS、青森県立保健大学	● ボランティア行動規範の啓発 全国社会福祉協議会
	● Tegami プロジェクト 電通、パラダイム

日本ユニセフ協会からこれまでに被災地/被災者に提供された支援物資一覧

飲料水、男児・女児用着上下、子ども用靴、長靴 (子ども&おとな)、子ども用衣服上下、紙おむつ、お尻ふき、生理用ナプキン、診療用具一式、ワクチン、子ども用ORS、乳児体重計、児童用身長計、デンターライト、エタノール消毒薬、マスク、牛乳、ヨーグルト、園児用おやつ、栄養機能食品 (サプリメント、肝油)、ビタミン強化米、マスク、抗菌防臭剤、手指消毒液、小中学生用ノート、文房具セット、コピー・ファックス複合機、プリンター、印刷機、輪転機、パソコン、データ通信キット、マウス、USBメモリ、プロジェクター、スクリーン、スピーカー、ミシン、学校用備品 (教卓、教員用デスク、いす、ワゴン、書棚、ロッカー清掃用具入れ等)、学校用文具類 (紙、マーカー、テープ、ファイル、台車、清掃用具等)、学用品 (ピアノカ、リコーダー、絵の具セット、書道セット、裁縫セット、算数セット、実験器具、天球儀等)、副教材各種、体操着、ジャージ・ウィンドブレーカー、上下履き、紅白帽、防災頭巾、給食着、園児用制服、ランドセル、通学バッグ、手提げバッグ、救急箱一式、レインコート、折り畳み傘、保育園・幼稚園用教室備品一式、保育園用簡易プール、給食用食器、調理器具、ラグ、マット、移動式黒板・ホワイトボード、ユニセフレクリエーションキット、「箱の中の幼稚園」、熊よけ鈴、おもちゃ各種、お給かき帳、クレヨン、色鉛筆、折り紙、粘土、ボール、通学用懐中電灯、電池、ろうそく (イベント用)、扇風機 (スタンド、壁掛け)、洗濯機、乾燥機、空気清浄機、仮設トイレ、浄化槽、放射線量測定器、保育園仮設園舎 (建設)、物置、卓上電気スタンド、防犯ブザー、テレビ、DVDプレイヤー、CDラジカセ、電気ポット、掃除機、更衣室・授乳用仕切りシステム、軽自動車、自動車、大型自動車、スクールバス、原付オートバイ、自転車



公益財団法人
日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)

〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス

Tel : 03-5789-2011 FAX : 03-5789-2036

www.unicef.or.jp